

M. A. HAYASHIDA
992 S. MARIPOSA AVE.
LOS ANGELES, CAL.

科は創作的今の手腕も無く、又

創作のいかなるものも老うず、唯更然と

宗橋田内を著した。

身二部、五部、十部、任に引合を見

私は介き感懐むに打たれた事じ

女と云ふか、

私は今もうた老うか、若き日の思い出にと

筆を運め、心算になつた

昭和二十三年三月二十日

田内元 宗橋

(一)

若き日の思出

短篇創作習作一

才一 日は沈み

才二 病人

才三 弟

才四 酒に酔ふ

才五 死を願ふ

才六 彼女と結婚

昭和三年

後

[illegible]

卷五

月
時
子

村口金村

(太陽堂作製)

のやう来るのは金取りの山々（一）と言つて平美に自
の名に入つて置いた女一あきまへ歸る言ひめ 同様に良
の女うなぐう一あも息あは二三にも古く自腹に帯結
のあも役二身心大苦を年暮す其斜にもちのに老るを
く顔のあねをきめ年暮の白人の舞あに機くたふ友人
女一人の事には言ひ言ひに居るや膽が（さ）休は顔食
それ（に）自腹に歸こしまつた
たう（一）病院に入つてまつたかうなつて見や
可笑想ひも五十に手交しどうして見舞つて是れ心
う同病者もあつた人も無りた
此の日曜朝はすぬし晴れ十月にはおれおれ
おつた 船は一回の体やすめに九時頃おれおれ
一なり着て金卓を圍ふたの如うた一永の蒼言つて
因親をも病つて無く同病者を生けをて一若く重なる婦
かろオロシの病田に 四人抱つた
また様は川り取るおれおれおれおれおれおれおれ
身のあてあつた（一）おれおれおれおれおれおれおれ
めおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
うあう無考がおれおれおれおれおれおれおれおれ
あつたやうなは又五時にはおれおれおれおれおれおれ

は乙小で良から歸り終らう
に有った
横は乙言に此に乙方へ一床に横

七乙方へ 羊の膏をうの人の心を横に有り方へう可

愛想が半回を来へ方へ方へう 横に乙方へう主人の唇に

方へ乙と思へば方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

羊の乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

今乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

うう乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と一乙方へ乙と

天益

死を来す。

十有十

加州の川町の街道に毎日同様にやがた葉先の唐に荷車を引
かこつて、事々々西に通り、産は町にあり、吾輩に身に事ある物も無く
度日は勿論出くも無く、妻に身を震へ、一たび、一
つた取柄を其書かえり、おれ、黒い、いかに、おれ、車には、
さうして、老人が、町に、彼を、舞う、煙、第、二、呼、人、の、名、を、
似、似、毎日朝、暮、の、間に、起き、
て、其、に、一、た、こ、言、ひ、あり、も、
を、其、一、つ、何、事、を、引、き、こ、
を、馬、を、つ、た、分、片、は、紙、の、境、に、
く、や、お、お、と、
木、の、枝、に、た、
を、煙、を、
を、木、に、
極、世、に、
彼、は、生、に、
う、う、
相、に、
無、の、
の、字、に、

死を尤もなうし心の心には未だに悔れこゝに悔れしを臺より事あり
今日迄の考から悔れし事あるが故に悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし
の悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし
悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし悔れし

りーは確つた。あり、紙の
 リー、本葉を——
 白人の女官をやさしく
Made you in my Jane
 はせに後集をうける見
 のちれ立ちをつた
 ハヤハには白紙のエールをまきく傷け二十年前後の時の美し
 毛の特に動かして人取むとす。花びら夢こそ右　ほめおの
 支那軍艦に像く像になうたのはみ一冊目読む所あるが其書より
 おはなれ新台地では日本語を知ることゝするフダラ着心やせんか
 柳井といふオセテ・オイル・デッジョー／＼あつて今は又こうなる病いよこ
 等客をおかつた身振りにころた日本原産何んのあたにサシにくる
 替りあらばき思ひついたのうちに然も其一人だつた
 仕は日暮この夏男のおうちにおかう言となめたことも金持の見かけ
 旅はおぼろげなり少なきものゝ女の世いつ結めの目にほゆる白きに
 こゝろと見てたことこれとおぼろげに眼にあきらめる様子をヤイ
 たす粗心の針と向いた何の日まで三日間は明々快々の
 別々和にいまうかにしらんから今そこへ来る女の顔をつくづくと
 踊らん舞一つ方—と見たもう幾度にもわたりし回子草花（木下）
 毎日長年パリの外でも命をます上終りは歩みに乗る控ねながら特に出
 休みのリリー言葉で身をよそひ運んだにまいらいどいてうたひ（小糸）

明治二十二年 下町 草子 角に 待つて 終る 一 ちの だ、下 昔め 云は 女

此の女、日本人の ぬて 聖肉は 言うた 人とは 何人 聞いて 不意 面を 生す

をす りな とも 女に 勝ては 佳の 蔵に ぬ ぬ えて ば 言の 母を 手 舞ふ 女

あつた 此の女は 此の女の 生涯を なる 言の 母を 見り 傳へに 田圃 った 女

か、 此の女の 母は 傳へに 醫師の 母を 此の 女に 言の 母を 言の 母を 言の 母を

に 勝る 事を 見て け、 又 用ひ たり 言の 母を 言の 母を 言の 母を 言の 母を

言の 母を 言の 母を 言の 母を 言の 母を 言の 母を 言の 母を 言の 母を

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

望む 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

事は 先 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

と 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

此の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に 言の 母に

待よ 早く 泣き出し

(な) (一)

はの女はけ人を 痛らさうともし

何にでもいふ 是は 是の言は 言ふ人なり (一) 是は 是の言は

言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

リウリウリウ 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

和は 昔時 何れも 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり 言ふ人なり

十 二 十 二 十 二

いゝ一々編いすあ
お父さんより言ふ方々様一ツお嬢を古すつて時
自分の毫に出入りにはありまいたの 和お母さんやお父
さんのあんな古にありやとて始一とありま 柳中
中柳殿もいふ迄に聲に古つて
和田中さんの中傷なさんといはなつかしく思ふまふ
あの古和の前には一言半端もいふ事やあつてやう古
つてけれぬ和も知るやうに思ふさんには和の事やお父さん
お母さんの事をいふにたり お父さんやお母さんの所
は
私も和日高市民の男の方やいらへる来う本た人とは
大角良の嬢さあありまさんお嬢様さんのお友達も和
おんのくの角のめつたあ 事無の事お話しに古の
いふ無あううかに思ふしまいさ
—— 奥村さん、こゝろすあ
桑地いふ本古すつてあ 本番に可参こゝに和回りの
折の書あま一何とていふ事いゝやうな和同い和原の方
いふ和料醫を用等なすつて居る本古方と本堂に奥村さん
やお父さんのお可参こゝに和 お父さん何とていふ事
いふまゝに古すつて居るいすあ

世の世に 何事も此の世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

残念の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に

世の世に 何事も此の世に 何事も此の世に 何事も此の世に